

令和5年度

帰国生入学試験問題

# 国語

(50分)

## 注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「（）」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、祖父の喜寿を祝う。
- 2、サッカーに夢中になる。
- 3、水分をよく吸収する。
- 4、高層ビルを建築する。
- 5、紅白戦を行う。
- 6、リッジ列車で旅行に行く。
- 7、知人と一緒にハイクを作る。
- 8、新しい実験ソウチを使用する。
- 9、試合でシユクテキと対戦する。
- 10、本物かどうかをウタガう。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸時代、土佐の国（現在の高知県）出身の万次郎は五人で漁に出たが、嵐に遭い無人島に漂着した。無人島の生活では井戸もなく雨水を溜めて飲み、海藻や貝を拾ったり鳥を捕まえたりして食していた。無人島での生活中に仲間の一人である重助は足を負傷した。ある日の早朝、帰国を願う万次郎は海岸で貝を拾っているときに沖を通る船を見つけ、アメリカの船に救助された。

万次郎らの収容された船は、鉄貼りの巨船であった。船体の長さ三十間、幅六間、三本の帆柱には十数片の帆を張り、前後左右に蜘蛛の巣のように緒繩を引き、左右両舷に三隻ずつの伝馬船を間隔整然とつりさげてあった。艫のところには数多の星光を染めぬいた旗をたて、乗組人員は色の白い異人と色の黒い異人を合わせ三十余人いた。

その巨船は船号をジョン・ホーランドといい、アメリカのマサチューセツ州ヌウ・ベツトホールド港の捕鯨船で、船長はホイットフィー

ルドという名前であった。

万次郎らは、船長ホイットフィールドの前に呼びだされた。左右には三十余人の乗組員が棒立ちの姿勢でいかめしく立ちならび、このいかめしく堂々たるありさまに威圧された万次郎らは①船長の前にひざまずいた。すると船長は何やら駄舌（注5）の声を発しながら、自由自在な手まねをしてみせた。それは次のように命じる手まねであろうと思われた。

——いや、そのほうらはひざまずくにはおよばぬ、立ちあがれ。拙者（注6）は胸に十字架をつるす坊主ではない。そのほうら、さあ立て立て。

それで万次郎らが立ちあがると、船長は筒袖衣（注7）の懐中から小さな帳面と木筆をとりだして、その帳面に船の絵をかけた。そしてその船に帆柱を一本かきまして、万次郎らの顔とその船の絵をかわるがわる指さした。それは次のように問いただしているのだろうと思われた。

——かくのごとく、この船には帆柱が一本ある。そのほうらにたずねるが、そのほうらの乗る船は、かくのごとく一本帆柱の船であるか？

万次郎らは「さようでございます」というようにうなずいた。船長は「おお、ジッパンニゼ、ジッパンニゼ」とうれしそうに口走って、やはり駄舌と手まねでもって問いかけた。

——彼方（注8）に島が見える。そのほうらはあの孤島に、何年（注9）くらい生棲（注10）していたか？ 指折りかぞえれば、一年、二年、三年、四年……ぐらい生棲していたか？

伝蔵は指で三日月の形と満月の形を空間にえがき、よく子どもたちが六つというときの指で六つのしるしをしてみせた。

船長はうなずいたが、「そのほうら、ゆつくり休息すべし」というように笑いを浮かべて、舳（注11）のほうを指さした。そして左右に居（注12）ならぶ人たちに何やら鋭い声をあびせ、棒立ちになつて乗組員一同の列を解散させた。

船長をはじめ乗組員一同は、まことに懇切な人たちであるように思われた。万次郎らは舳のほうの縄束のかけにしりぞいて、みんなで重助の足の布を巻きかえてやった。重助の足痛は打身からきた筋の引きつりで、筋が骨からはずれているように思われた。重助は痛い痛い顔をしかめていたが、あの船長は代官（注13）くらいの見識があるかもしれないといった。さつき船長の前に立っていたとき、がまんできないほど痛み出したが、②がまんしていたというのである。

彼らはおたがいに、ひもじくてかなわないと話しかけていた。するとそこへ色（注14）の黒い異人がきて、琉球薯（注15）の焼いたのを山盛りに入れた木鉢（注16）をおき、「これを食え」と手まねをした。五人のものはこれこそ極楽だとはかりに食べたが、色の白い異人がそこへとびだしてきて、やにわに木鉢をとりあげた。この色の白い異人は色の黒い異人を突きのけて、さんざんに叱（注17）りとばし、木鉢をもって不きげんそうに立ち去った。なんとというじゃけんなことをするものだろうと、五人のものはその色の白い異人を怨（注18）みに思った。

ところが、憎らしいと思っていたその色の白い異人は、まもなく麦粉と獣肉を煮たのを持ってきて「これを食え」と手まねをした。五人

のものがこれこそ極楽だと食べたすと、今度はまた白米の煮たのを持ってきて、「これを食べ」と手まねをした。しかし、麦粉も白米も獣肉もいたって分量がすくなくて、五人のものは食いたりなかった。飢えているものが急に大食すると即死することがあるということだが、五人のものはそのとき、<sup>③</sup>異人のそういう心づかいには気がつかなかった。

翌日、六月八(九)日<sup>ウ</sup>の朝、船長は一人の黒人にいいつけて、島の岩屋から衣類、鳥の毛皮、大亀の甲羅<sup>こうら</sup>などを伝馬船で運んでこさせた。五人のものは船長の親切には心から感謝していたが、かびのわいた衣類や生くさい鳥の皮は、ここでもう必要もなさそうであった。彼らはもはや筒袖衣や革の靴を船長から拝領していた。筒袖衣のさっぱりした着<sup>き</sup>こちは **A** 悪くなかった。しかし革の靴は、**B** 履<sup>は</sup>きこちがよくなかった。

その日のお昼すこし前、船は碇<sup>いかり</sup>をあげ東南<sup>エ</sup>のほうに船首をむけて出帆した。五人のものは船底の八畳間ほどの一室を与えられ、そのほうらはゆっくり休養するがよかろうといいわたされた。彼らは三日目ごろには気力も恢復<sup>かいふく</sup>し、五日目ごろには五体もしっかりとした。こんなに丈夫になって遊んでいるのは冥利<sup>みょうり</sup>につきるので、七日目には船長に申しでて水夫の仕事を手つだうことにした。重助の足痛も、この船の外科医の世話で次第によくなっていた。外科医の診断によると、重助の病気は「マイ・フーツソル」または「ユア・フーツソル」という病名だそうであった。

医者は重助の患部に酸<sup>こうやく</sup>のにおいのする膏薬<sup>こうやく</sup>を貼り、その上に油紙をおいて、さらに幅のせまい白布を巻きつけた。病気は一日一日とうすらいでいった。伝蔵<sup>でんぞう</sup>や寅右衛門<sup>とらえもん</sup>は医者<sup>いしや</sup>の腕前に感服してしまつたが、マイ・フーツソルとかユア・フーツソルとかその名前からして、なるといふ因果な病気であつたこととあきれていた。

八日目に船は針路を北東にむけて進み、九日目にはまた東南にむけて進み、十日目には、帆柱の上で望遠鏡をのぞいていた物見役が鯨の見える合図をした。万次郎はいそいで甲板にかけあがつた。見れば南のほうの海上に、白い波をたてながら数頭の鯨の泳いでいくのが見えた。船はその白波をめあてて追いかけていき、波の五十うねりほどの近くまで鯨に追いつくと、船体の向きをかえて船脚をとめた。同時に六隻の伝馬船が迅速<sup>じんそく</sup>に繰りおろされ、舷側<sup>げんそく</sup>の縄ばしごをおりていった面々は、一隻に六人ずつ乗りこんで一頭の鯨をめがけて漕ぎ寄せた。本船にのこつたのは、外科医と炊事人夫と万次郎らだけであつた。

六隻の伝馬船はさきを争つて進んでいたが、そのうちに一隻は、波のうねり二つほどさきに漕ぎぬけていった。銛<sup>もり</sup>を手を持った刃刺人<sup>はざし</sup>は舳<sup>はたけ</sup>に立ち、その伝馬船が波にのつて高くゆりあげられた瞬間を見て、鯨にむけ発止<sup>はつし</sup>とばかり銛<sup>もり</sup>を投げつけた。伝馬船は波のうねりを横に切つて本船のほうに漕ぎもどし、銛<sup>もり</sup>の縄を長くゆるめた。鯨はその縄をひいて伝馬船をひきまわし、波のうねり三町四方<sup>さんちやう</sup>あまりも逃げまわつた。他の五隻の伝馬船からも、つづけさまに銛<sup>もり</sup>が飛んでいった。鯨は大波をたてて狂いまわり、**C** 突如<sup>とつじゆ</sup>として半身を海中からあらわした。それは海中に屹立<sup>きつりつ</sup>する奇岩<sup>きがん</sup>のように見えた。銛<sup>もり</sup>の一つが鯨の心臓に命中したのである。鯨は潮吹孔<sup>しほふきあな</sup>から高く血柱を吹き、次

第に狂いまわる活力をうしなっていた。そして波のうねりにまかせながら浮き沈みして、その大きな凶体すうたいが最後にゆっくり横たおしになった。伝馬船の水夫たちは鯨の背中にとびうつり、止めをさした太い縄を尾びれに結びつけたりした。

万次郎らは本船の甲板で、<sup>④</sup>かたずをのんでこの鯨漁の光景を見物していた。彼らはつくづく感嘆して、おたがいに土佐で鱸釣すずきりをするのとはくらべものならぬと評判した。土佐では鯨一頭をつかまえると七浦栄えるといっている。異人式のこの仕掛けで鯨をしとめるなら、七浦どころか七十浦栄えるかもしれないだろう。

伝馬船は鯨を本船に曳航えいこうして、それを舷側にくくりつけた。万次郎らは作業のじやまにならないように甲板の片すみにいき、人びとの作業するようすを見物した。滑車がまわった。すると鯨の体が胴ぎりにされた。皮は長刀ながなたのようなもので剥ぎとられた。すべて仕事は秩序整然とおこなわれた。甲板におがくずをまくものもあつた。おがくずで血糊ちのりを拭きとるものもあつた。鯨の皮を刻むものもあつた。そのほか大釜おおがまで煮て油をぬきとるもの、油を樽たるにつめこむもの、樽を船底の倉庫に運ぶもの、肉を海中に掃きすてるもの、D 各自の仕事を分担して敏速にそれを始末していくのであつた。

作業がおわると、船はまた東南の方角に進航した。海鳥の群れは船にしみこんだ鯨の体臭をしたい、夕方ちかくなるまで船を追いかけてきた。

その翌日、帆柱に登って望遠鏡をのぞいていた万次郎は、大鯨と子鯨が波間に浮いているのを発見した。大鯨は胸びれで子鯨をかかえるようにして逃げだそうとしたが、伝馬船の刃刺人たちは前日と同じ方法で、寄つてたかつてその大鯨をしとめた。子鯨は逃げるにまかせて、すておいた。万次郎は鯨を発見した<sup>⑤</sup>功により、水夫のかぶる新しい帽子を船長の手からほうびに授与された。伝蔵、重助、寅右衛門、五右衛門ごえもんの四人は、鯨油の樽を船底に運び甲板の血糊を掃除した功により、彼らも同じような帽子をほうびにもらつた。

(井伏鱒二「ジョン万次郎漂流記」より)

(注1) 「三十間」……………一間は約一・八二メートル。

(注2) 「両舷」……………船の側面のことを舷という。

(注3) 「伝馬船」……………上陸の際などに使う小型の船。

(注4) 「鱸」……………船の後部。

(注5) 「駄舌」……………うるさいだけで理解できない言葉。

(注6) 「拙者」……………自分をへりくだって言う語。私。

(注7) 「筒袖衣」……………筒状の衣服の袖。

- (注8) 「生棲」……………生活の意味。
- (注9) 「舳」……………船の前部。船首。
- (注10) 「代官」……………君主に代わってその地を治める役職。
- (注11) 「マイ・フーツル」……………「私の足は炎症を起こしている」という意味。万次郎たちは病名だと思い込んでいる。
- (注12) 「刃刺人」……………ここでは銛を用いて鯨を突く人。
- (注13) 「発止」……………勢いよく飛んで物に当たるさま。
- (注14) 「三町」……………一町は約一〇九メートル。
- (注15) 「曳航」……………船などをロープで引っ張ること。

問 一、——線①「船長の前にひざまずいた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分たちを救出してくれた船長たちに感謝の気持ちを持ったから。
- イ、初めて乗る異国の船に緊張して、立っていられなくなったから。
- ウ、指揮官のもと、統率のとれた船員たちの様子に圧倒されたから。
- エ、他の人とは身なりが異なり身分が高いと思われる人が現れたから。

問 二、——線②「がまんしていた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、痛さよりも日本に帰りたい気持ちが強く、日本に送り返してほしいことを先に伝えるべきだと思ったから。
- イ、目の前に立っていた船長が敬意を表すべき人物だとわかり、失礼な態度をとってはならないと思ったから。
- ウ、痛さを訴えても言葉がわからないので異人がどのような治療をするかわからず、不安に思ったから。
- エ、無人島から助けてもらえただけで十分で、けがの治療までお願いしたら失礼になると思ったから。

問 三、——線ア↘エの「の」の中で、他とは性質が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問 四、——線③「異人のそういう心づかい」とありますが、それはどのようなことですか。文章中の言葉を使って、「↘こと。」に続くように三十文字以上四十文字以内で答えなさい。

問 五、



↘



にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、あまり                    イ、すべて                    ウ、まんざら                    エ、やがて

問 六、——線④「かたずをのんで」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、緊張しながらじっと見つめて  
イ、のどの渴かわきをがまんして  
ウ、集中できずに他のことを考えて  
エ、自分がやりたいことをがまんして

問 七、——線⑤「功」と異なる意味で使われているものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、成功                    イ、功績                    ウ、功名                    エ、気功

問 八、この文章に小タイトルをつけるとしたら、どのようになりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、万次郎ら、仲間との結束を強める
- イ、万次郎ら、意外な才能と出会う
- ウ、万次郎ら、ますます故国を遠ざかる
- エ、万次郎ら、帰国の決意を固める



【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問の都合上、一部省略した箇所があります。）

科学技術、特にデジタル技術が急速に進み、大きな変革の波が押し寄せる中、私たちの暮らし、そして労働現場ではどのような変化が起こってくるのでしょうか。

最初に労働現場から見ていきます。二〇一三年に発表された論文「雇用の未来——コンピュータ化によって仕事は失われるのか」は、日本において、あと一〇年で①「消える職業」「なくなる仕事」として大きな話題となりました。この論文はオックスフォード大学の研究員マイケル・A・オズボーンらによるもので、米国における七〇二の職種についてコンピュータに取って代わられる確率を仔細に試算したところ、四七％の職業が一〇～二〇年後には機械に取って代わられると結論づけたのです。マスコミでも大きく取り上げられましたので、見た人も多いと思います。

その結果を受け二〇一五年、日本のシンクタンクのひとつである野村総研は、先の研究員らとの共同研究で、日本における六〇一の職業を調査したところ、今後数十年のうちに四九％がコンピュータ化されるとしました。これらの代替は主に、デジタル化され日々蓄積されるテキストデータや画像データ、様々な機器やセンサからのデータを収集して、分析するという、ビッグデータの利用可能性が拡大していることによるものです。そしてさらには、AI、特に機械学習の進歩によって、高度な知識やスキルを有する専門家の判断への助言や意思決定、作業を代替できるようになっていることもあります。

A 医療分野では、遺伝子解析、総合診療支援、画像診断、医薬品開発などにおいて、これらの技術の利用が急速に進んでいます。ロボットの活用においても、既に実用化され、市販されている手術支援ロボット「da Vinci」は、一ミリ単位の精緻で複雑な動きが可能です。従来の手術に比べ、短時間の練習で困難な手術をこなすことが可能になってきています。B、AIとロボット、さらにここに仮想現実（Virtual Reality）技術を組み合わせることで、医療施設のない地域でインターネットを通じて画面越しに診察を受けたり、高度な技術を持つ医師がいない地域でも、遠隔で手術が可能になる日も近いとされています。

AIやロボット等が、その発達によって、人間に取って代わる可能性（代替の可能性）はあります。C、二〇二〇年に起こった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックでは、エッセンシャルワーカーの重要性が明らかになりました。エッセンシャルは英語で「必要不可欠な」、ワーカーは「労働者」。D、必要不可欠なサービスを提供してくれる人のことです。コロナ禍の際は、まずは医療に関

わる人。そして生活に必要な食料品や日用品を扱うスーパーやコンビニ、ドラッグストアの人。それらを作る人、届ける人、ゴミを処理する人。仕事や病院などに行くために利用する電車やバスの運行に関わる人などです。幼稚園から大学まで、教育機関もエッセンシャルな存在です。学習は授業さえ受けられればよいと思いますが、オンライン授業を受けることが続くことでストレスを感じるなど、生

徒や学生の心への影響も表れました。

このエッセンシャルワーカーと呼ばれる人たちが、ロボットに置き替わったとしたら、そのサービスを受ける人たちはどのように感じるでしょうか。代替可能性が低い職種として、医療系を例にとってみると、医療ソーシャルワーカー、小児科医、精神科医、理学療法士などが挙げられています。医療ソーシャルワーカーとは、主に病院において患者が、地域や家庭で自立した生活を送ることができるよう支援する専門職の人です。これらの職種に共通するのは、**I**が要求されることです。これは医療に関わるものだけではありません。他の職種でも、代替可能性が低いのは、人間を相手にする仕事です。それはなぜでしょうか。ほかにどんな仕事と考えられるでしょうか。

また医療にAIやロボットを活用する際は、膨大な医療データを活用することになります。様々な検査機器や手法が開発され、データが集まってくるのは良いことですが、それを誰がどのように活用していくかを慎重に考えなければなりません。個人のデータは、既往歴だけでなく、家族を含めた遺伝的なデータがあります。その扱い方が問題です。今後特定の病気が発症する予測もできる遺伝子データは、究極の個人情報といってよいでしょう。

先端科学技術の開発が急速に進む一方で、それらが社会の中に実現した際に起こってくる問題があります。臓器移植や生殖医療など、社会での議論が十分になされていないものや、法律が整備されていないことがこれまでもありました。人間の身体、生や死についての考え方は、文化や宗教、民族によって異なるので、他の国を真似すればよいというものではありません。<sup>③</sup> AIについても、今から想定して議論を進めていくことが望まれます。

ここまで労働現場がどう変わるかを見てきました。次に生活がどう変わるかについて、私の大好きな料理の話で考えていきます。料理は、食べる時の気温や湿度、食べる人が疲れているかどうかなどで、微妙に味を変えて作ります。そんな相手を思う気持ちだが、調理の熟達化につながっていくのではないのでしょうか。そこに必要なのは、食べる人のことを思い、試行錯誤しながらいろいろ作ってみること。そして結果を振り返り、失敗や成功からコツを見出し、次に活かすこと。

今日の料理は何を作ろうかと思ったら（作れるとしたら）、何から考えますか。自分が食べたい料理、例えばハンバーグやカレーというメニューから考えることもあるでしょう。あるいは、冷蔵庫にあるものから考えることもありますね。

AIを使ったレシピ作成支援システムでは、食材を複数入力し、イタリアンやフレンチなどの調理方法、誕生日や平日などのスタイルを選ぶと、ユーザの好みのレシピを複数提案してくれます。その中にはこれまで人間が思いつかなかったものも多くあります。AIには、与えられた知識ベース（知識の集合）の中にある複数の知識を使って、新しい知識を動的に生成する機能があるのです。近年は、人間の代わりに調理するロボットのレストランも出てきました。使った鍋まで自動で洗ってくれます。AIのレシピと調理ロボットを組み合わせたことで、<sup>④</sup>おいしい料理が毎日食べられるのでしょうか。

(美馬 のゆり「A Iの時代を生きる——未来をデザインする想像力と共感力」より)

(注1) 「シンクタンク」……政治、経済、科学技術などの課題の調査や研究を行ったり、解決策を提示したりする研究機関のこと。

(注2) 「ビッグデータ」……人間では全体を把握することが困難な巨大なデータ群のこと。

(注3) 「A I」……人工知能。

(注4) 「パンデミック」……世界的な大流行。

(注5) 「既往歴」……これまでにかかったことのある病気の履歴りれきのこと。

問 一、——線①『消える職業』『なくなる仕事』とはどのような仕事ですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

デジタル技術の進歩により、1、二字に代わって2、六字が行える仕事。

問 二、AとDにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、さらには      イ、つまり      ウ、しかしながら      エ、例えば

問 三、——線②「それら」の指し示す内容を文章中から十五字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問 四、Iにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、正確なデータ分析力

イ、患者とのコミュニケーション力

ウ、医療現場におけるマーケティング力

エ、関係者へのプレゼンテーション力

問 五、――線③「AIについても、今から想定して議論を進めていく」とありますが、何を「想定」するのですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から二十字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

二十字以内

があること。

問 六、――線④「おいしい料理が毎日食べられるでしょうか」とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「おいしい料理が毎日食べられる」にちがいないということ。

イ、「おいしい料理が毎日食べられる」はずがないということ。

ウ、「おいしい料理が毎日食べられる」かどうかはわからないということ。

エ、「おいしい料理が毎日食べられる」かどうか読者の意見を聞きたいということ。

問 七、この文章で述べられていることとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、科学技術の進歩により、これまで代替できなかった高度で専門的な職業においても代替が進んでいる。

イ、科学技術の進歩により、新たな問題が生じる可能性もあるので、十分な議論が必要である。

ウ、科学技術の進歩により、AIやロボットが人間に取って代わる可能性が生じたが、まだ人間しかできない仕事もある。

エ、科学技術の進歩により、過疎化が進んだ地域でも都会と同じような手術が受けられるようになった。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

マンガ家の水木しげるがある日、とてもうれしそうな顔をして家に帰って来た。「バナナを買ってきた」と言われた<sup>①</sup>妻は驚く。「どこにそんなお金、あったんですか」。1960年代、バナナがまだまだ高級品だった時代である。

しかも水木は売れない貸本マンガ家で、生活は貧しかった。腐りかけて茶色くなったものを安く買って来たと言い、ふたりでパクパク食べた。そんな思い出を妻の武良布枝<sup>むらぬのえ</sup>さんが著書『ゲゲゲの女房』に記している。

高級品としてのバナナは台湾から輸入されていた。その後、安く食べられるようになったのはフィリピンからの輸入がどっと増えたためである。いまも売り場では、フィリピン産が目立っている。

そんな輸出国からの異例の要請である。在日フィリピン大使館がおととい、日本小売業協会に対して「適正な小売価格での販売」を申し入れた。輸送の費用や肥料の価格などが上昇しており、このままではバナナ産業が維持できなくなる恐れがあるという。

「<sup>②</sup>物価の優等生」と言えば卵だが、バナナもそう呼ばれることがある。日本では過去20年ほど、小売価格が横ばいのままらしい。私たちが優等生ぶりを求めすぎることが産地を苦境に<sup>おとし</sup>陥れているのだろうか。

評論家の鶴見良行が岩波新書『バナナと日本人』を書いて、フィリピンの農園で働く人びとの<sup>A</sup>を告発したのが1982年である。あれから40年。「生産者に思いをはせよ」という鶴見のメッセージは、重みを失ってはいないようだ。

(朝日新聞「天声人語」より)

問 一、――線①「妻は驚く」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、お金がないはずの夫が、高級品のバナナを買ってきたから。

イ、売れない貸本マンガ家である夫が無神経にうれしそうにしていたから。

ウ、夫が腐りかけたバナナを格安だからという理由で買って来たから。

エ、お金を渡していないのに、夫が大金を持って来たから。

問 二、——線②「物価の優等生」を言い換えた表現を文章中から十一字で探し、抜き出して答えなさい。

問 三、Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、困難

イ、貧困

ウ、現実

エ、心情

問 四、筆者が伝えたいこととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、消費する国は、本当に必要な商品なのかをしっかりと考えて、無駄にならないように輸入するべきだ。

イ、生産する国から輸入するだけでなく、その国への輸出を増やして生産国の生活水準を向上させるべきだ。

ウ、輸出する国の生産者に対して、経済的に余裕のある輸入側の国が積極的に経済援助を行うべきだ。

エ、輸出する国の生産者の経済状況を改善するため、輸入する国は適正な価格で商品を販売するべきだ。

問 五、この文章を前半と後半で分けるとしたら後半はどこから始まりますか。最初の五字を抜き出して答えなさい。

